た日中両国の人々の霊を祀るため、両軍将兵の血の染みた大場鎮の土を焼き込んだ興亜観音像を伊豆山に建立され、近くに庵を結んで読経三昧の日々を送られたことは知られている。中国通を以て自ら任じ、中国をこよなく愛し、多くの中国人の知己を持ちながら、大将は対中強硬派であり、南京攻略の急先鋒であった。上海以来南京に至る戦闘での部下の死せる者二万四千、これに数倍する中国兵と民衆の犠牲、観音堂に籠られる大将の胸中に去来するものは何であったろうか。

大将の日記で見る限り、大将は司令官として赫々たる戦果を挙げたにも拘らず、最後迄心を満たされることは無かったようである。政府、大本営など上層部との意見の相違、犬猿の仲であった中島中将との確執だけでなく、直接の幕僚すらも大将と一心同体ではなかったらしい。加うるに末端の将兵の軍紀風紀の問題では、国内・国外への影響も顧慮して終始頭を悩まし続け、機会ある毎にそれを戒めなければならなかった。

終戦は大将の読経三昧の生活を奪った。昭和二十年十月十九日、A級戦犯としての逮捕状が出たからである。大将はあれ程注意していた心無い一部将兵の不軍紀な行為の「監督責任」を問われ有罪とされ、二十三年十二月二十三日従容として死につかれたのである。

南京戦が終了して既に半世紀を経て、往時を偲び今を想うと、多くの尊い犠牲者のことも、忠勇無双の将兵のことも、大東亜戦の敗戦という歴史の大きなうねりの蔭に没して、語り継ぐべき人々も逐次世を去り、まことに悲しい限りである。

その意味でこの戦史は、我々元将校が後世まで末長く残すため、公正な資料に準拠して纏めた南京戦の報告書である。

最後に、亡くなられた日中両国の犠牲者の御冥福を心よりお祈りして『南京戦史』の筆を措く。

（終）

「南京戦史」関係年表

出典　戦史叢書・近代日本総合年表（岩波書店）・太平洋戦争への道・資料編（朝日新聞社）・松井大将日記・飯沼守参謀長日記・上村利道日記・中島師団長日記・畑俊六日記（みすず書房刊）・抗戦簡史

7月7日　北京郊外蘆溝橋付近で日中両軍衝突
8月5日　「交戦法規ノ適用ニ関スル件」梅津陸軍次官より駐屯軍参謀長あて通牒（「日支全面戦ヲ相手側ニ先ンシテ決心セリト見ラルルカ如キ言動ハ努メテ之ヲ避ケ」るものとした）
8月9日　上海虹橋飛行場付近の道路を通行中の上海陸戦隊西部派遣隊長・大山中尉と斎藤一等水兵、中国保安隊に射殺される
8月13日　閣議、上海居留民保護のため、陸軍2コ師団派遣を決定
8月15日　政府、支那軍膺懲、国民政府の反省を促す帝国声明を発表　上海派遣軍を編組　海軍中攻隊、南京・南昌を渡洋爆撃
蔣介石、全国総動員を下令、大本営を設置（全面戦争体制を採択）
8月21日　南京で「中ソ不可侵条約」調印
8月22日　第3師団先遣隊、呉淞に敵前上陸
中国国民政府軍事委員会、中共軍を第八路軍として中国軍に編入
8月23日　第11師団、川沙鎮に上陸
8月24日　第3艦隊長官に中国船舶に対し揚子江以南の中国海湾封鎖の大命伝達
8月26日　英国駐華大使ヒューゲッセン、わが海軍飛行機の誤射により負傷（9月21日、外交折衝により解決）
9月2日　閣議、北支事変を支那事変と改称
9月5日　わが海軍、全中国沿岸封鎖を宣言
9月7日　台湾軍に重藤支隊の上海派遣を下令
9月9日　中国、国防最高会議を設置（主席蔣介石、副主席汪兆銘）
9月11日　大本営、上海派遣軍の戦闘序列、第9、第13、第101師団の上海派遣を発令
9月12日　中国、日中間の事変を国際連盟に提訴
9月14日　重藤支隊、川沙鎮上陸
9月19日　第3艦隊長官、在上海各国総領事に南京爆撃を予告（20日、非戦闘員の避退勧告）　海軍第2聯合航空隊、南京空襲開始（25日まで空襲11回）
9月25日　政府、日中紛争に関する国際連盟諮問委員会の招請（9・21）を拒絶
9月27日　第9師団、呉淞に上陸　参謀本部第一部長交代（石原莞爾少将→下村定少将）
9月28日　国際連盟総会で日本の中国都市爆撃非難決議を全会一致で採択
10月1日　第13師団、呉淞に上陸
10月5日　米大統領ルーズベルト、シカゴで日独を侵略

国家として非難する（いわゆる隔離演説）
10月12日　参謀本部、主作戦を北支方面から上海方面に転移を決定
10月15日　上海派遣軍、大場鎮総攻撃を開始（26日占領）
10月26日　陸海軍中央統帥部、陸海軍航空協定（中支方面使用兵力・陸軍45機、海軍233機）　第10軍の戦闘序列を令し、杭州湾北岸上陸の大命発令　支那方面艦隊新設（第3・第4艦隊で編成、長官・長谷川清第3艦隊長官兼務）
10月30日　駐華独大使トラウトマン、中国国民政府外交部次長と会談
北支から第16師団を転用、上海派遣軍に編入
10月31日　上海派遣軍、蘇州河を渡河、南岸の中国軍陣地に対する攻撃を開始
11月1日　参謀本部の編成を一部改正、事変勃発以来、常に意見が対立していた戦争指導課と作戦指導課を一課に統合した
11月2日　広田外相、ディルクセン Dirksen, Herbert Von 駐日独大使に対中国和平条件を示す（11月5日、トラウトマン大使より蔣介石に通告、トラウトマン工作始まる）
11月3日　ブラッセルで日中紛争に関する九カ国会議始まる（11月15日、日本非難決議採択）
11月4日　「交戦法規ノ適用ニ関スル件」次官通牒、「各軍ニ通牒セラレアルニ付」として丁集団（第十軍）参謀長宛発信（陸支密第一七七二号）
11月5日　第10軍、杭州湾北岸に上陸、上海戦線の背後をつく
11月7日　「中支那方面軍」の編合を下令（作戦地域は蘇州―嘉興の線以東と限定）
11月9日　上海戦線の中国軍、退却を開始
11月13日　第16師団と重藤支隊、白茆口付近に上陸
11月14日　中支那方面軍、蘇州―嘉興の線に向かい追撃を始める（19日、この線に進出）
11月16日　中国国民政府、重慶遷都を宣言
11月19日　中支那方面軍、独断で作戦制限線を越え無錫・湖州攻撃を準備
11月20日　皇居内に大本営を設置
11月22日　中支那方面軍、南京攻略の必要を意見具申
11月23日　駐華ジョンソン米大使、漢口へ移転
11月24日　第1回大本営御前会議で陸海軍作戦計画を上奏、先に指示した中支那方面軍の作戦地域の制限を解除
11月24日　唐生智、南京衛戍司令長官に任命される
12月1日　大本営、中支那方面軍の「戦闘序列」を下

令、南京攻略を命令

12月2日　蔣介石、トラウトマン独大使と会談（日本の和平条件を質問、7日駐日ディルクセン独大使、広田外相に伝達）　上海派遣軍司令官に朝香宮鳩彦中将を親補

12月7日　蔣介石夫妻、南京を脱出

12月9日　松井中支那方面軍司令官、唐生智に開城投降を勧告（回答なし）

12月10日　中支那方面軍司令官、南京城攻撃続行を命令

12月11日　早くも日本全国で南京陥落の祝賀行事が盛大に挙行された

12月12日　米砲艦パネー号、南京上流揚子江上で海軍航空部隊の誤爆により沈没、蕪湖付近を航行中の英砲艦レディバード号、第10軍砲兵部隊の砲撃により損傷

12月13日　中支那方面軍、南京占領

12月17日　南京入城式

12月18日　中支那方面軍慰霊祭

12月21日　閣議で日華和平交渉に関する駐日独大使への回答文を決定し上奏（22日提示）

12月22日　佐々木到一少将、南京城内粛清委員長に就任

12月24日　第16師団による南京難民区の兵民分離査問工作始まる（1月5日まで続行）

12月28日　参謀総長・陸軍大臣連名の通牒「国際関係ニ関スル件」が中国派遣各軍司令官あて出される　第10軍司令部、杭州へ移転

1月1日　南京市自治委員会成立

1月2日　阿南陸軍省人事局長一行、南京へ向かう（1月8日帰国）

1月4日　軍紀風紀の振作に関し中支那方面軍司令官あて参謀総長要望（1月9日、塚田方面軍参謀長名「依命通牒」が出される）

1月11日　大本営、政府首脳による御前会議、支那事変処理根本方針を決定（国民政府が和を求めて来ない場合は、以後これを相手にせず、新政権の成立を助けるなど）

1月12日　外務次官、駐日独大使館参事官と会談（15日までに和平交渉についての中国側回答を得たい旨依頼）。駐支独大使、中国外交部長へ日本側情勢を伝え回答を促す（13日、中国外交部長は日本向け回答文を独大使に手交）

1月14日　駐日独大使、中国側回答（日本提案の具体的な内容を知りたい）を広田外相に手交、内閣は閣議を開き対策を協議したが、大本営は即断に反対し、政府との連絡会議開催を要求した

1月15日　参謀本部は、大本営政府連絡会議で政府の主張する和平交渉打切り案に烈しく反対したが、事変遂行中、いま内閣退陣の政変を起こすは得策ならずとする米内海相らの意見に屈服、ついに中国との和平交渉打ち切り決定

大本営、中支那作戦終了に伴い北支那要域確保のため第16師団を上海派遣軍から除き、北支那方面軍編入を発令

1月16日　政府、駐華独大使トラウトマンを通じ中国に和平交渉打切りを通告、近衛首相「爾後国民政府を対手とせず」との対華声明を発表

1月18日　川越駐支大使に帰朝命令（28日上海発帰国）（中国・許世英駐日大使は1月20日横浜港発帰国、駐日大使官参事官揚雲竹ら一部の館員は13年6月11日まで在留した）

参謀本部第一部長交代（下村定少将から橋本群少将へ

1月20日　杉山陸相「長期持久戦に臨む将兵の心構え」を全軍に訓示、「全軍将兵一致結束特ニ堅忍持久ノ精神ヲ以テ職分ニ最善ノ努力ヲ傾注スヘシ」

1月22日　第73回帝国議会再開（3月8日、臨時軍事費48億円を含む予算案成立。3月24日、国家総動員法可決、4月1日公布）　中島第16師団長、南京を去り、天谷少将、南京警備司令官に就任

1月26日　南京市内で日本兵によるアリソン米書記官殴打事件発生

ソ連人義勇飛行士の操縦する中国空軍機、南京を空襲

1月27日　上海派遣軍の第13師団、中国軍の反撃を封ずるため准河河畔進出作戦開始（2月10日まで）

1月28日　本間参謀本部第二部長、上海へ（2月1日、外交団を招待し南京市内でパーティー開催）

2月4日　大本営政府連絡会議（今後の持久戦方針について統帥部とはるかに積極的な政府との議論かみ合わず）

ドイツ、国防相ブロンベルク、陸軍司令長官フリッチュの解任を発表（ヒトラー、統帥権を掌握、その命によりファルケンハウゼン以下のドイツ軍事顧問団は蔣介石の強い反対を押し切り、13年4～5月本国引揚げとなる）

2月7日　上海派遣軍慰霊祭で松井大将異例の「軍紀引き締め」を訓示

中ソ軍事航空協定調印（ソ連、中国に軍用機・技術者・操縦士の提供を約束）

2月10日　大本営、第114師団を第10軍の戦闘序列から除き、北支那方面軍編入を発令

2月14日　大本営、中支那方面軍・上海派遣軍・第10軍の戦闘序列を解き、中支那派遣軍の戦闘序列を下令（2月18日、統帥発動）

2月15日　国民政府外交部亜州司日本科長・董道寧、満洲国外交部・伊藤芳男の案内で長崎上陸、上京して参謀本部謀略課長・影佐禎昭大佐らと日中和平問題につき会談

2月16日　大本営、御前会議において「戦面不拡大方針」を確立（「13年夏季を目途とする支那事変帝国陸軍作戦指導要綱」を裁可）「支那ニ於ケル現占拠地域ヲ確保シテ其ノ安定ヲ期スルト共ニ対蘇支二国作戦ノ為軍ノ実質的整備ノ完遂ヲ図リ第三国特ニ蘇国ニ対シ警戒ヲ厳ニス

状況之ヲ許スニ至ル迄右戦面ヲ拡大シ又ハ新方面ニ対シ作戦ヲ行フコトナシ」とした。「占領地域」ではなく「占拠地域」としたのは、8月5日の「陸軍次官通達」と関連するものと考えられる

2月18日　中支那派遣軍司令官・畑俊六大将午後2時半、上海呉淞飛行場着　海軍の中攻隊、初めて重慶を襲う

2月21日　松井大将、参謀長・塚田攻少将ら幕僚を従え瑞穂丸に乗船、午後2時上海発離任（25日東京着）

中国軍爆撃機十数機、杭州飛行場に来襲（事変始まって以来、わが飛行場に対する初攻撃）

2月22日　柳川中将、午後3時、上海出港、東京丸で離任帰国

2月23日　朝香宮午後3時、上海出港、吉野丸で離任帰国

中国軍機、台北付近を爆撃（わが領土に対する初めての攻撃）

2月26日　大本営、第11師団（歩兵第10旅団欠）の内地帰還と歩兵第10旅団の中支那派遣軍指揮下編入を発令

3月1日　ソ連、中国に総額五千万ドルの借款を供与（第一次借款協定、これらの借款は飛行機、戦車、火砲、爆薬、燃料など軍需資材の対ソ買付けに使用された）

3月3日　陸軍省軍務課員佐藤賢了中佐、衆議院国家総動員法案委員会で説明員として答弁中、委員に向かい「だまれ」とどなって、問題となる

3月21日　米国パネー号賠償金221万4千ドルを要求、日本承諾

3月28日　中華民国維新政府、中支那派遣軍の指導で南京に成立（行政院長梁鴻志・立法院長温宗堯・内政部長陳群——「三人共大した代物にあらず」畑俊六日記3月13日の項）

3月29日　漢口で国民党臨時全国代表大会ひらく（4月1日まで）、「抗戦建国綱領」を発表、蔣介石、党総裁に就任し非常大権を与えられる（副総裁汪兆銘）

4月1日　国家総動員法公布（5月5日施行）

4月4日　駐ソ重光大使、ソ連人飛行士の対日参加についてリトビノフ外務人民委員に厳重抗議を申し入れたが、ソ連の反応はきわめて冷淡であった（日本政府当局の保証するところによれば日本と中国とは戦争をしていないということであり、日本政府の言い分は理解できない——4月5日付「イズベスチヤ」）

4月6日　瀬谷支隊（第10師団、徐州東北方台児荘で苦戦し退却

4月7日　大本営、徐州作戦の発動を下令

4月20日　北支那開発株式会社法・中支那振興株式会社法を公布

5月14日　国際連盟理事会、日本の毒ガス使用に関し、非難決議案を採択

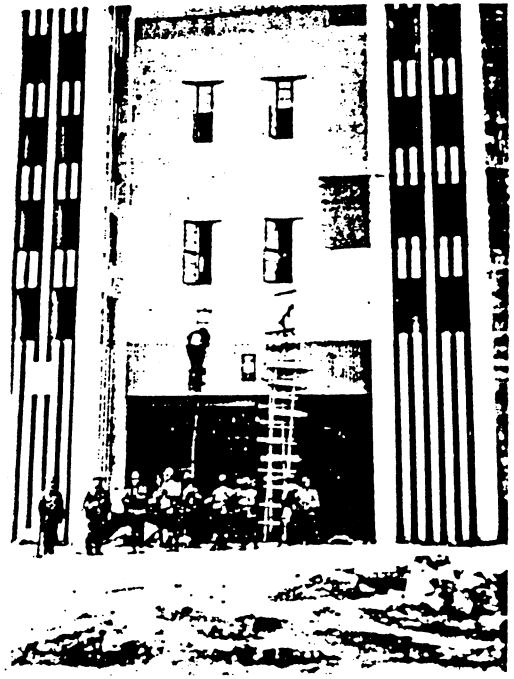
5月19日　第13師団、徐州を占領

5月26日　毛沢東、延安の抗日戦争研究会（6月3日まで開催）で「持久戦論」を発表

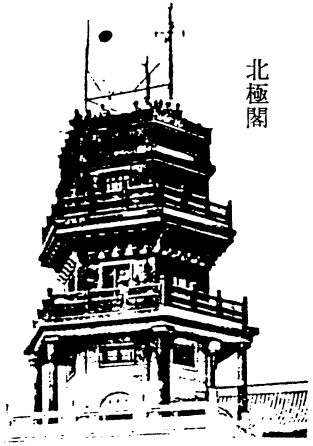
鷹森部隊の占領した武定門

藤田部隊（第三師団）本部
写真集「戦塵」より

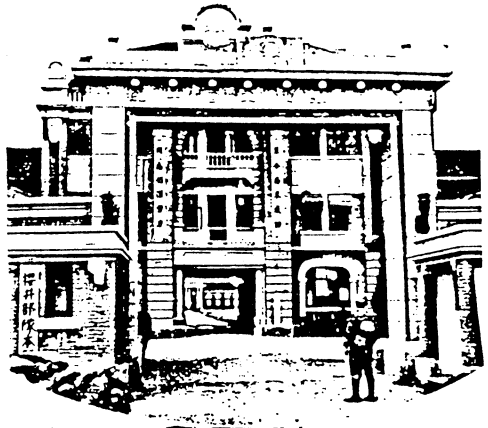
南京攻略の跡



扉を固く閉ざした武定門



北極閣



中国軍官学校正門

最高法院

中山北路

松岡政人 134
松川晴策 201, 203
松本重治 286, 404, 406, 407, 408, 409
的場隊（歩7） 197

【み】
三明保真 218
水谷荘〔日記〕 198, 329
溝口元悟 137
三竝貞三 8
宮本四郎 168, 387

【む】
六車政治郎 97
ムッソリーニ 14
武藤章〔参謀副長〕 5, 19, 148
村岡実 194
村上独潭 375

【も】
毛沢東 421
森王琢 97
守田省吾 222
森英生 169, 321
森吾六 250
諸岡安一 259
両角業作 81

【や】
安川定義 114, 179
泰山弘道 266, 289, 340
柳川平助〔中将・司令官〕 9, 17, 67, 218, 247, 284, 383, 395, 420
山際喜一 176
山崎正男 219, 258, 284, 286, 290
山田梅二〔支隊〕 75, 80, 81, 231, 260, 302, 322, 323, 324, 325
山本五十六 290
山本隼人 226
山本聯隊長（歩150） 209

【ゆ】
俞済時 50

【よ】
揚雲竹 419
姚中英 139
葉肇 50
吉住良輔 103

【ら】
ラーベ 268, 276
羅卓英 49

【り】
李江 50
リトビノフ 421
李副長（57師） 139
劉啓雄 377
劉興 49
劉四海 317
劉斐 140, 149
梁鴻志 420

【わ】
脇坂次郎〔部隊〕 75, 107, 177

〔は〕
橋本欣五郎 288
橋本群 399, 420
橋本以行 261, 264, 289
長谷川清〔艦隊司令長官〕 8, 260, 262, 284, 288, 289, 405, 417
畑俊六 403, 416, 420
羽田武夫 160
浜崎富蔵 225, 226, 316
浜園忠夫 131
林正明 169, 278, 333
原田政右衛門 11
ハレック 315
馬超俊 269
バック 371
バルボ 14

【ひ】
肥後大尉（歩23） 220
日高信六郎 267, 393, 402, 405
ヒトラー 419
ヒューゲッセン 416
馮聖法 50
平井秋雄 157, 158, 159, 161, 264, 316
平本渥 190, 279
広田弘毅〔外相〕 290, 418
広田豊〔中佐〕 401, 403

〔ふ〕
ファルケンハウゼン 6, 11, 13, 419
フィッチ 268, 276
フリッチュ 419
ブロンベルク 6, 419
深堀遊亀 405, 405
福井正勝 251
福井領事 393
巫剣雄 50
藤井大尉（歩19） 116
藤田清 134, 161
藤田戦車隊 127
藤田部隊（第三師団） 335
藤原武 127
古北光太郎 97

【へ】
ベーツ 370, 371

【ほ】
星善太郎 251
細見惟雄 171
堀口瑞典 406
本郷忠夫 395, 402
本間雅晴 401, 402, 419

【ま】
前川参次 230
前田音次郎 278
前田吉彦 317
牧原信夫〔日記〕 169, 321, 333
マギー 268, 279, 278, 300
益田少尉（歩45） 225
増田六助 167, 326
松井石根〔大将・軍司令官・日記〕 3, 19, 20, 21, 23, 24, 26, 27, 67, 68, 69, 72, 147, 148, 163, 247, 269, 284, 285, 286, 289, 338, 340, 395, 396, 400, 403, 404, 405, 407, 408, 411, 418, 420

陳　　群 420
陳　　頤　鼎 271
沈　　発　藻 50

【つ】
塚　田　　攻〔参謀長〕19, 20, 69, 398, 418, 420
塚　本　浩　次 395
辻　　四五郎 318
土　井　晩　翠 289
土　屋　正　治 6, 177
堤　　千　里 158, 316, 334

【て】
ディルクセン 417, 418
ティンパーリー 269
丁　　治　盤 49
手　塚　　清 215
寺　内　大　将（北支方面軍） 399
寺　崎　隆　治 160, 264
寺　田　冨　吉（歩36） 110
寺　田　与之助 368

【と】
董　　道　寧 420
唐　　生　智 45, 46, 49, 139, 140, 148, 235, 273, 274, 277, 302, 356
陶　　宝　金 384
鄧　　竜　光 50
十　時　和　彦 219
富　崎　熊　雄 317
冨　田　龍太郎 169, 321, 333
トラウトマン 18, 49, 417, 419
土　居　初太郎 320
ド　ゥ　ー　エ 8, 14

堂ノ脇　光　雄 126
土橋　第四中隊（野重15） 177

【な】
中　川　泰　秀 26
中　沢　三　夫 97, 141, 163, 167, 269, 301, 310, 346, 347, 387, 391
中　島　今朝吾〔中将・師団長〕 82, 166, 301, 319, 333, 337, 341, 344, 419
中　島　典　雄 334
中津留伍長（歩47） 218, 219
中　村　　進 134
中　山　寧　人 69, 148, 285, 394, 396
永　津　佐比重 5
永　見　保　治 112
永　山　喜　一 241, 316
永　山　　力 127
成　友　藤　夫 225, 316

【に】
西　浦　節　三 164
西　沢　弁　吉 215
西　島　　剛 180
西　　義　章 289, 290
二　宮　義　清〔参謀〕 6, 11, 22
鈕　　先　銘 274, 275

【ぬ】
額　田　　担 375

【の】
野　田　耕　夫 112
野　村　敏　則 113

朱　　赤 139
首藤中尉（歩47） 135
祥雲伍長（歩47） 219
蔣　介　石 4, 45, 49, 51, 140, 149, 273, 293, 302, 416, 418, 419, 420, 421
蔣　公　穀 278, 355
庄　野　欧　一 255
邵　百　昌 51
白　川　寿　視 115
ジャキノー 267
城　島　赳　夫〔大尉〕 99, 147, 187, 192, 194
徐　継　武 49
徐　源　泉 49
ジョンソン 388, 417

【す】
末　松　茂　治 118
菅　原　梅　吉 112
杉　山　陸　相 419
鈴　木　　茂 183
鈴　木　宗　作 403
スマイス 268, 269, 367, 368, 369, 370, 373, 374
住　谷　磐　根 265, 330
澄　田　政　夫 257, 320
角　　良　晴 162, 338

【せ】
関　口　鉱　造 264, 265
関根　保右衛門 28, 42
ゼークト 11, 13
瀬　戸　大　尉（16師団） 387
銭　　大　均 61
専　田　盛　寿 386

【そ】
宋　　希　濂 50
曾　　国　荃 36
宋　　彗　敏 378
宋　　美　齢 273
孫　　元　良 50
孫　　文 49, 72

【た】
田　岡　良　一 296, 312, 314
高　田　利　種 290
高　橋　義　彦 225, 228
高　松　半　市 215, 314
鷹　森　部　隊（歩68） 75, 206
武　田　丈　夫 175
竹田宮　恒徳王 4
多　田　　駿〔中将・参謀次長〕 17, 18, 19, 20
立　作　太　郎 312
辰　巳　栄　一 11
館野　軍医中尉（歩66） 215
田　中　軍　吉 225
田　中　新　一 5
田名網伍長（歩66） 211
谷　田　　勇 165, 385
谷　　寿　夫 126, 217, 228, 305
田　上　八　郎 6
ダーディン 48, 140, 235, 271, 273, 275, 297, 300, 303, 327, 347, 348, 365, 366, 368
譚　　邃 50

【ち】
値　賀　忠　治 8
長　　勇〔参謀〕 163, 325
張　　治　中 51

木村正世 251
許　伝音 276, 328
許　世英 419

【く】
草場軍曹（戦車1） 194
草場辰巳〔支隊〕 82, 83
国崎　登〔少将・支隊〕 62, 68, 69, 76, 234, 241, 243, 248, 316, 334, 335, 340, 378
倉迫准尉（歩47） 135
クレーギー 290
グルー 8, 290, 401

【け】
桂　永清 50, 51, 52

【こ】
高　致嵩 139
谷　正倫 51
小坂　工兵大尉（工9） 175
児玉義雄 341
近衛首相 419
駒沢貞安 136
児森(高槌)少佐（歩150） 209
小山中佐（憲兵） 395
小山弘健 14
近藤英次郎〔戦隊司令官〕 69, 259, 260, 262, 284
近藤俊清 222
近藤正信 116
後藤光蔵 248

【さ】
西郷従吾 13
斎藤一等水兵 416
斎藤良衛 69
坂井徳太郎 130, 134
榊原主計 321, 322, 323, 366, 376, 401
坂　清 167
佐々木到一〔支隊・手記〕 62, 69, 75, 82, 83, 87, 153, 154, 158, 234, 254, 295, 301, 314, 319, 327, 331, 333, 334, 341, 362, 384, 386, 387, 394, 418
佐々木孟久 177
佐々木元勝 162, 168, 279, 320, 321, 330
佐々木六郎 375
佐藤賢了 420
佐藤　質 27
佐分利隊（歩7） 197
沢田正久 254
サンドリ 289

【し】
重藤支隊 4, 416, 417
司徒　非 139
品川大尉（戦車5） 211
篠原武司 27
信夫淳夫 313, 315, 316
柴山兼四郎 19, 290
渋谷大尉（歩66） 212
島田勝巳 160, 163
清水貞信 112
下野一霍 147
下村　定〔少将・作戦部長〕 4, 9, 18, 19, 20, 416, 419
周　仏海 377
粛　山令 51, 139

岩波茂雄 289
岩間少尉（歩45） 230

【う】
上村利道〔日記〕 279, 284, 285, 286, 402, 411
鵜飼敏定 10, 213, 225, 226, 316, 377
牛島　満〔旅団・先遣隊〕 76, 126, 129, 130, 137, 217, 219, 220, 222
内田義直 387
宇都宮直賢 11, 403
梅津次官 416
浦野清治郎 218

【え】
易　安華 139
江島虎雄 218
エスピー 347, 384, 388
榎　勝春 194

【お】
王　啓久 50
汪　兆銘（精衛） 377, 416, 421
王　耀武 50
大川内伝七〔陸戦隊司令官〕 262, 284
大杉　浩 206
大薗庄蔵 227, 228
大谷光照 195
大西　一 5, 377
大野部隊 99
大橋　（歩36） 110
大山勇夫 3, 416
岡田崎一 183
岡田重一 378
岡田　尚 148
岡田酉次 27, 376
小笠原勝国 183
緒方敬志 218
荻洲部隊〔第13師団〕 323
荻平昌之 134
奥　少将〔旅団〕 118
尾崎秀実 13
小原重孝 225
折小野末太郎〔日記〕 137, 231
折田　護 330
温　宗堯 420

【か】
何　応欽 51, 298
郭　岐 274, 275
霍　守義 50
角田栄一 80
影佐禎昭 19, 420
樫木義雄 177
梶浦俊彦 225
片山正太郎 112
何　知重 50
加藤正吉 251, 321
金丸吉生 344, 377
金田高秋〔大尉〕 136, 137
川越大使 285, 405, 420
川島大尉（騎3） 251
河辺虎四郎〔作戦課長〕 18, 19, 400, 413
河村弁治 27
閑院宮載仁親王 394, 399

【き】
キーナン 148
木佐木　久 386

あとがき

高橋登志郎

南京戦の正しい姿を再現しよう、そして定本として後世に残そうと、編集作業を発足してから四年有半、漸くにして「南京戦史」が完成する。責任者として正直言ってやれやれという気持ちで一杯である。

いま膨大な校了ゲラを見ながら、頭の中に去来するさまざまな感懐のうち、その一端を述べてあとがきとしたい。

一、賛否の声

『偕行』誌に定本刊行のことを発表してから賛成激励の声も多々あったが、反対あるいは慎重の声も少なくなかった。その賛否の声は今日に至ってもなお続いている。

しかし反対者の意見は常に謙虚に聞かねばならない。反対あるいは慎重の声の論点を要約すると次の五点であった。

(1) 編集委員会は何を根拠に捕虜の処断の総てを不法と断定できるのか
(2) 仮にできるとしても何故出版しなければならないのか
(3) 確定できない数字を何故発表するのか
(4) 光輝ある皇軍に泥を塗るのか
(5) 中国国民に詫びるとは何事か

本書は学術的な戦史書を目指している。我々編集陣には本書に於て(5)の中国々民に詫びるというような政治的な意

『南京戦史』人名索引

1. 中国人は姓名を日本風の音読し，第三国人は姓をカタカナで五十音順に配列した。
2. 〔　〕内は階級・部隊・役職・日記の存在を示す。
3. 姓と階級・役職のみしか記載されてない場合，（　）内に所属を補足した。

【あ】

青木　喬 150
青柳由郎 98
秋永　力 126
秋山充三郎〔少将・旅団〕(114D) 118, 121, 210
秋山義兌〔旅団・支隊〕(9D) 75, 103, 106, 171, 185, 195
朝香宮鳩彦王〔司令官〕 67, 176, 195, 284, 395, 405, 411, 418, 420
阿南惟幾 294, 401, 402, 418
阿部輝郎 323
安部康彦 222
天谷直次郎〔支隊〕 4, 68, 234, 259, 384, 389, 390, 391, 416
新井敏治 161
荒尾興功 401
有末　次 20
アリソン 388, 402, 419
有馬参謀（海軍） 290
安東軍曹（歩47） 218

【い】

飯沼　守〔少将・参謀長・日記〕（上海派遣軍） 3, 27, 205, 250, 256, 285, 286, 319, 320, 323, 325, 340, 346, 347, 362, 384, 387, 393, 394, 395, 396, 401, 408
池田早苗 169, 321, 333
伊佐一男〔聯隊長・日記〕 192, 195, 196, 327, 329, 330
諫山春樹 401
石射猪太郎 402
石原莞爾〔少将・第一部長〕 3, 9, 19, 416
石松政敏 13, 164, 201
一刈第一大隊長（歩66） 215
井出宣時〔旅団〕 75, 106, 171
伊藤範治 13
伊藤芳男 420
伊藤義光〔大隊長〕 176
稲田正純 401
犬飼総一郎 321, 334
井家又一〔日記〕 197, 329
井ノ上少尉〔歩47〕 219
井上直造 127
伊庭益夫 97
今林少尉（歩45） 225
井本熊男〔作戦課員〕 5, 11, 19
岩仲義治〔戦車隊〕 99, 147

図などあるべくもない。また(4)の皇軍に泥を塗るような考えなどあるはずがないが、真実の探求のためには臭いものにも蓋をしない態度をとるだけである。また(1)の捕虜の処断の総てを不法と断定する云々の件については、我々は真実の究明のみ心掛け、合法か非合法かの問題には踏み込まないこととした。そもそも捕虜の処断は「ヘーグ陸戦法規」により不法であるが、苛烈な戦場に於ては状況上止むを得ぬ場合があることを国際法学者も認めている。南京戦においてもそのような例に当たると思われるケースもあるが、可能な限り集め得た資料についても、これは完全に合法である、と断定し得るに足る決定的な資料は発見されていない。よって我々はありのままを記述するにとどめたのであって、捕虜の処断の総てを不法であると認識しているわけではない。

しかし(2)の問題については、四年前の当時からあった「南京事件、二十万～三十万の大虐殺」ということが、大部分の教科書にまで現われる状況で、事態は改善されるどころか定着化の方向をたどっていた。我々は反対の声を聞きながらも、定本刊行の大方針はいささかも揺るがなかった。それはこの教科書に現われた記述の改善の道は、遠いようであるが真実の究明と、その発表に求めるしかないとの信念を確認しあっていたからである。

なおまた(3)の数の発表の問題であるが、言われる通り絶対正しいという数字を確定し得るはずはない。しかし判らないからといって口を噤んでいたらどうなるであろうか。それこそ二十万～三十万を肯定したことになるであろう。ここでも一次資料に依って、究明された数字に基づいて、議論するという道しか残されていないのである。

二、真実の究明

言葉で言うのは簡単であるが、これほど困難な事はない。同じ事を同じ処で見ても人によってその内容は異なる。証言をなさる方も所詮人間である。しかも五十年も昔のことである。失礼ながら記憶違いもあれば錯覚もある。また御自身の立場もあるし周囲への配慮もあるであろう。老いてますます矍鑠、頭脳明晰な一将軍から貴重な日記の提供を戴いたが、その将軍も御自分の日記を改めて読み直して、自分の記憶に如何に多くの誤りがあったか愕然としたと言われる。証言の真実性というものはムツカシイものである。

参戦者が当時書いた日記はまさしく一級資料であるが、これとて本人が他日、他人に読まれると思って書けば事態は自ら違ってくる。また上級将校の場合は報告された事がそのまま記載されているが、これとて確認していないので全部が全部正しいとは限らない。

なお下級指揮官や下士官、兵の場合は立場上、眼や耳に入る範囲が自ずと限定され、時に誤った判断があるのは当然である。

また貴重な一級資料にしても読まれた方の視点に依っては、解釈もまた違ってくることも有り得ることである。しかし何といっても日記が貴重な一級資料である事に変わりはない。五百ページに及ぶ日記は、その他の資料と共に真実に確実に近づく鍵を握っているといえよう。

三、十人十色

この修史作業は予定より大幅に遅れたのであるが、その理由の一つは多くの会員の方々の御意見を参考にしたためであった。編集委員はもちろん経験見識ともに優れた方々ではあるが、所詮十名足らずの人数であり本書の特殊性を考え、私は関心を有する多くの方々の御意見を戴く必要性ありと判断した。本文のコピーを偕行社の役員の方々、および本書に関心を持たれる地方偕行会長の方々等にお送り申し上げた。その結果大部分の方から貴重な御意見を頂戴したのである。もちろんその御意見は委員会で慎重に検討し、有益であり改善すべき点は率直に本文に採り入れたの

である。

御意見を伺いながら感じたことは十人十色ということである。極端な場合はまさに百八十度に分かれる。同年代で同じ釜の飯を食べても人各々である。もっともこれは編集委員の方々においても例外ではなかった。一例をあげれば「南京事件」、「虐殺」、「不法殺害」というような点になると、その意味する内容についての見解だけでなく、その言葉の使用の可否まで意見が分かれたのである。単に一語、一行の問題で激論が続いた時もあった。まして多々ある資料の取捨選択においてをやである。

しかし私は見識があり、かつ各人各様の意見をお持ちの委員の方々が、その意見を真剣にたたかわしたからこそ、最も公正な戦史が出来上がったものと信じている。すなわちち本書は右にも左にも偏することなく、一途に真実に迫り得たものと思っている。

四、畝本正巳氏の功績

本書は「まえがき」で御紹介した、編集委員其の他の方々の、並々ならぬ御努力で出来上がったものであるが、ここで特に畝本氏について言及しないわけにはいかない。この四百ページを超す「南京戦史」本文はたとえ委員各位の合作とはいえ、畝本氏の書かれた膨大な労作が本書完成の核であった事は間違いない。ここに心より敬意を表する次第である。

そもそも畝本氏は御自身の当時の体験より、参戦した多くの方々の証言をもとにして、無実を証明すべく南京戦史に取り組まれたのであるが、結果的には真実追求のためありのままの記事を書かねばならなくなってしまったのである。畝本氏の背後には百名を超える、「真っ白」の証言をした方がおられる。同氏の御心情はまことに察するに余りある。

しかし本書は真実のみを再現せんとしたもので、白黒を論じてもいないし、裁定も下していない。畝本氏に証言を提供された方々も、本書を読まれれば必ずや訝とされるであろう。

五、会員各位への御願い

我々編集陣としては南京戦ならびに「南京事件」についても、その真実の究明について、今日の時点に於いて期待し得る最善の成果を得たものと信じている。その結果として、二十万、三十万という数字が全く真実性に欠けていることを証明し得たと確信している。

会員各位におかれてはどうかこの本を熟読して下さい。そして「南京事件イコール二十万、三十万の大虐殺」という誤った認識が、歴史上の事実としていまや定着しつつある事態に対処するため、重要な参考資料として座右にお備え戴ければ幸いです。我々は今後も新資料の発掘や研究を継続し、この定本をさらに真実に近づけるべく努力したいと考えております。会員各位の御協力を切に御願い申し上げます。

平成元年十一月